

都市部の公園・東部グループの公園における生物多様性の保全の取組

指定管理者アメニス東部地区グループ
生物多様性推進責任者 兼 利用促進担当（綾瀬エリア）
氏名 齋藤 桃子

I. 環境宣言

1. 日比谷アメニスグループでは「花とみどり」を扱う企業として令和5年に環境経営を進めるための環境方針を策定した。その中でも「自然再興」を重要な柱の一つとして位置付けている。都市における緑地が生態系の一部として機能することも重視し、設計から工事、管理に至るまでの生物多様性の損失を止め、回復させるための取組を推進している。また、そこから得られる自然の価値を共有し、人と自然が共生する社会の実現に貢献することを目指している。弊社グループで指定管理を行っている猿江恩賜公園にて実施されている「多様な生物が生息する都立公園づくり事業」やその他の都市部の公園・東部グループでの取組について順応的管理および普及啓発と協働の面から紹介する。

II. 多様な生物が生息する都立公園づくり事業（猿江恩賜公園）

1. 猿江恩賜公園の概要

猿江恩賜公園は、昭和7年の開園以来、地域住民にとって自然との触れ合いの場として長く親しまれてきた。東京都江東区に立地し、新大橋通りを挟んで北園と南園に分かれている広大な都市公園である。北園はテニスコートや広場、遊具が整備され、開放的で活気に満ちた空間が広がっており、南園は野球場の他、芝生広場や庭園が整備され、樹林や草地、上池・下池と呼ばれる水辺を有する落ち着いた空間となっている。多様な自然環境がバランス良く存在しており、本公園は東京都の施策の一環である「多様な生物が生息する都立公園づくり」事業（以下「多様性事業」という。）の対象地として選定された。平成26年度に策定された「東京都長期ビジョン」においては、生物多様性保全に向けた環境整備と裾野の拡大のための取組として、猿江恩賜公園をはじめ31都立公園で実施する「多様性事業」が位置付けられ、その後も継続して実施されている。

2. 生物多様性保全管理工事

本公園は平成29年度に「生物多様性保全管理計画」が策定され、特に南園において令和4年から5年にかけて利用と保全のゾーニングに則って多様な生物が共存できる環境の整備工事を行った。（図1）

南園の樹林地では、日照を確保して下草の育成を促進するために樹木の間引きや強剪定を行った。また、土砂流出防止のために「粗朶柵」を設置した。

上池の護岸は一部が垂直な石張で、池底も単一なゴロタ石敷きであったため、池で活動できる生物が限られていた。そこで、池底に傾斜を設け、湿性植物を植栽し、湿地から水辺へと自然な移行帯「エコトーン」を形成することで水生昆虫や魚類、水辺の鳥類が利用できる環境整備を行った。

下池は、西側ではヨシの過密な生育によって閉鎖的になっていた水面を改善するために一部のヨシを除去し、湿地性昆虫の生息に適した開放的な水面を取り戻す工事を実施した。東側では、カワセミの営巣地となる垂直の土手を造成し、採餌のための止まり木を設置した。

下池の西側には緩傾斜の湿性草地が広がっており、ニホンアカガエル等、カエル類の移動経路となっていたが、草丈が低くカエルの隠れる場所が少ないことや公園利用者の踏圧による乾燥化が進行していることが課題となっていた。そこで草丈は刈高を段階的に設定する計画とした。また、公園利用者が草地へ直接立ち入る範囲を限定し、踏圧の影響を緩和させるために木道を設置した。さらに外来種駆除対策として「池干し」を実施し、アメリカザリガニやウシガエル、カダヤシ、外来のカメ類などの駆除を行った他、オオフサモやウチワゼニクサなどの駆除にも取り組んだ。下池の東側には園路を挟んで直翅類や冬鳥の生息地となる様々な草丈のイネ科草本が優占する草地を計画し、さらにフジバカマを植栽した。



図1 猿江恩賜公園(南園)の概略図

3. モニタリングおよび順応的管理



写真1 粗朶柵設置箇所

生物多様性保全管理工事の後、令和5年10月から指定管理者によるモニタリングと順応的管理が始まった。定期的なモニタリング調査の結果を受け、関係者での合意形成を図りながら順応的管理を進めている。斜面に設置した粗朶柵は落ち葉を受け止めて湿潤な表層を創出し、林床に草本が見られるようになった。また、カエル類や昆虫類の隠れ家やすみかとして利用される様子も見られた。(写真1) 斜面地の下の人の利用が少ないエリアにはエコス

タックを新たに設置し、落ち葉を溜めている。徐々に腐葉土化が進んでおり、さらに様々な生物に利用されることを期待している。上池護岸沿いに計画されたエコトーンは土の流出やカモ類による捕食圧のため、残念ながら植生が定着しなかつた。そこで、タフブネを設置しカサスゲ等を植える

など、エコトーンの創出に向けた工夫を続けている。下池の脇に新たに設けられた木道の両脇をはじめ草の刈り高を変更する計画となったエリアでは、草刈り前には業者との現地確認を行い多様な環境を創出するための選択的除草や利用とのバランスを考慮しながら草



写真2 草刈り前打合せ

の刈り高を段階的に設定するなどのきめ細やかな管理を行った。(写真2) 木道脇では意図した通り草地をカエル類が利用する姿が見られたほか、タコノアシやミコシガヤなど攪乱依存性の希少種が見られるようになった。下池に設けられたカワセミの営巣地では工事完了後初の繁殖期に早速ペアが営巣準備を始めた。令和6年度は営巣には至らなかったが、早々にカワセミに利用されたことは関係者一同驚きをもって受け止めた。竣工後の保全活動として引き続き外来生物の駆除も積極的に行っている。具体的にはオオカワヂシャは種子が散布される前に随時抜き取りを行うとともに温水除草による対策も試みている。ウチワゼニクサは遮光シートで覆い、光合成を阻止した結果大幅に減少させることができた。(写真3) ウシガエル、カダヤシ等の外来水生生物についても夏期を中心に駆除を実施した。



写真3 ウチワゼニクサの遮光

III. 生物多様性保全に関わる普及啓発と都民協働（猿江恩賜公園・尾久の原公園）

1. 猿江恩賜公園

生物多様性保全は単なる環境整備では実現できず、地域の方々との協力によって実現可能となる課題と捉え、地域住民や学校、研究機関、自治体など、様々なステークホルダーとの連携を重視している。猿江恩賜公園での生物多様性保全工事施工前には近隣住民の方々や高校生と現況調査を実施し、工事中にカエルの通り道を妨げないための工夫を行った。また、施工期間中には、近隣住民や教育機関と協力し、池の水抜きを生き物の救出イベントとして実施したり、近隣の小学校を対象に生き物について興味をもってもらうための課外授業を開催した。更に、施工後には毎年2～3回、「多様性事業連絡会」を実施し、東京都・学校・NPOなどとモニ



写真4 冊子「猿江恩賜公園のいきものブック」

タリング結果の確認及び順応的管理の方針について協議を行っている。さらに、江東区で開催されている「生物多様性フェア」への参加や、園内でのパネル展示、利用促進ボランティア「なぎの会」が作成した冊子の配布、ロボットによる自然情報案内などにより、園内の自然環境の情報発信・収集に努めている。（写真4）

2. 尾久の原公園

当グループが指定管理を担う7つの都立公園では自然観察会やガイドウェブアプリの導入、ブログ等での園内自然環境の発信を積極的に行っている。その中でも筆者の利用促進担当エリアである尾久の原公園の例を挙げたい。同園は工場跡地の空き地によみがえった荒川下流域の水辺環境を中心に造設された公園である。そのため、草地や水辺周辺では開放水面の維持や、環境に応じたゾーニングに基づいた刈り高の調整や、光環境を改善するための刈り草の移動、刈り残し等により動植物の生息・生育環境を保護する取組を行った。ミゾコウジュやタコノアシといった湿地に生息する希少植物が多数見られ、希少種「チョウトンボ」をはじめとしたトンボ類も多数見られる。令和6年8月には開園前後の調査以来、約30年ぶりとなる生態調査を当時の調査業者により実施し、植物や昆虫類の生息状況の現状把握と、約30年後の変化遷移の把握を行うとともに、今後の環境保全への提言・提案を得るなど公園の根幹となる自然環境の保全に対して積極的な取組を行った。

そうした貴重な自然環境に触れ合えるよう、普及啓発では、園内や区内で発見の難しいとされている生き物を探す企画「尾久の原バウンティハンター」を夏季に、園内の動植物を見つけることでトレーディングカードの収集が出来る「尾久の原ヒーローズ」を通年で実施し、園内自然環境理解への普及啓発を行っている。（図2,3）ま

た、生物との触れ合いや興味の喚起に対する更なる仕掛けとして春から秋にかけては昆虫などの小さな生き物の生息が最も豊かな場所である湿地に沿う形で、生き物の推移帯となる草地の刈り残し「虫の王国」を作っている。（写真5）キンエノコロやチカラシバなどのイネ科の草本が優占し、湿地から生物の供給を受け、多くのバッタ類やイトトンボ、カナヘビなどが見られるエリアとなり子供たちが動植物と触れ合うことのできる活気あふれる場となっている。さらに令和5年の冬には花壇の横には職場体験に訪れた中学生とともにバイオネストを設置



図2 尾久の原ヒーローズ



図3 尾久の原バウンティハンター

し、花壇管理作業で発生した花がらなどを堆肥化し再び花壇で使用する循環を目指している。(写真6) 設置後半年ほどで腐葉土化が進み、ダンゴムシなどの生物が多く見られるようになった。令和6年の冬には新たに小さな生き物の越冬場所となる大小二棟の「インセクトホテル」を設置し、利用者の注目を集めている。(写真7) これらの取組は数年間の継続を経て利用者に浸透しており、自然と触れ合う公園としての認識も広まっている。また、生物にあまり興味のない層にも「面白そう!」と感じさせるゲーム性の高さや、見た目の珍しさを備えており、公園で生物多様性の保全に取り組むにあたり重要な点を示唆していると考えている。



写真5 虫の王国



写真6 バイオネスト



写真7
インセクトホテル

生物多様性の保全は生物や自然環境への関心の度合いに関わらず、全ての人に関係するものであり、様々な立場からの働きかけが必要な課題である。公園管理者の立場では、本稿の報告のようなハード面の働きかけによって、人間だけではない生き物も利用する都市緑地として多様な環境を創出することが可能である。また、順応的管理に関する協議・連携や「遊び」との掛け合わせにより、様々な関心の層を取り込み、利用者・職員共に自然を見る目を増やすことも可能である。地域の自然環境や他の生物の役に立つ存在としても公園が機能するよう、多くの場所で多くの方々と手を取り合って取り組んでいきたい。

※猿江恩賜公園に関しては雑誌『国立公園』830号「都市公園における生物多様性への取組と地域連携」に株式会社エコルの河原氏と連名による同内容の記事が掲載されている。